

パーリ語初期仏教経典における brahmacārin- の語について

梶原三恵子

1. はじめに

brahmacārin- というサンスクリット語は、インド最古の文献『リグヴェーダ』の最新層⁽¹⁾に初めて現れる。初期ヴェーダで「[聖典の] 言葉；その靈力や実現力」を意味する「ブラフマン」(brāhman-) という名詞と「行く；動き回る；～に携わる」(car) という動詞語根に -in- 接尾辞が付されたこの語は、直訳すれば「ブラフマンに携わっている [者]」となる。『リグヴェーダ』以降もこの語は、ヴェーダ文献およびその後の様々なサンスクリット語文献にしばしば現れるのみならず、パーリ語をはじめとする中期インド諸語の文献でも用いられる。パーリ語の場合は、brahmacārin- という語幹形はサンスクリット語と同じで、語尾変化が少し異なる。

前稿 [梶原 2019]⁽²⁾では、ヴェーダ文献における brahmacārin の語義について論じた。その際の結論を要約すると次のとおりである。ヴェーダ文献では brahmacārin の語は大きく分けて二つの意味を示す。一つは、師の存在を前提とし、師のもとで禁欲的修行生活を行いながらヴェーダ聖典を学ぶ「ヴェーダ学生」である。この語義は『リグヴェーダ』に次いで古い初期ヴェーダの『アタルヴァヴェーダ』から確認される。もう一つは、「性的に禁欲している

[者]]である。この語義が明らかに確認できるのは中期ヴェーダのアーラニヤカ以降である。これら二つの意味は、文脈によって、重なりあうこともあれば、いずれか一方が強調されることもある。

brahmacārin の語は、ヴェーダの宗教の重要概念の一つである brahman という語を含んでいる。では、ヴェーダの宗教の外においては、brahmacārin はどのような意味で用いられたのか。本稿では上述した前稿の結論をふまえて、初期のパーリ語仏教経典で brahmacārin の語がどのように用いられているかを検討し、ヴェーダ文献との共通性と非共通性を論じる。

2. パーリ語初期経典における brahmacārin と brahmacariya

brahmacārin について論じるまえに、この語と形の上で対になっている brahmacariya (パーリ語の形: サンスクリット語では brahmacarya: 直訳すれば「ブラフマンに携わること」という単語について述べておく。brahmacarya / brahmacariya の語は、ヴェーダ文献にもパーリ語初期経典にも頻出する。別稿⁽³⁾で論じたように、ヴェーダ文献においてはこの語は、広義には「禁欲的修行生活」(「[性的禁欲を含む/を主とする生活制限を遵守しつつ務めに励む]修行生活」)をさし、狭義には「性的禁欲」をさす。各用例の語義は、文脈によって振幅がありつつも、基本的にはこの広義・狭義の両極の間のどこかに当てはまる。そして、パーリ語初期経典においても、brahmacariya の語義は、この二つの用法の間のどこかに収まる例が多い。つまりヴェーダ文献でもパーリ語初期仏典でも、幅を大きくとればではあるが、brahmacarya / brahmacariya の語義はさほど大きな相違なく用いられている⁽⁴⁾。

一方、本稿で論じる brahmacārin の語も、以下にみていくように、ヴェーダ文献と初期経典とで語義に重なりはある。ただし重なり具合には偏りがみられる。本稿の結論を一部先取りして述べると、パーリ語初期経典ではこの語は基

本的に、広義の「禁欲的修行を行っている [者]」と、狭義の「性的に禁欲している [者]」の、いずれかをさすが、そのかたわらで、ヴェーダ文献での主要語義の一つである「ヴェーダ学生」をさす用例は原則的にみられない。以下に主な用例を検討していこう。

3. 「禁欲的修行者」としての brahmacārin

3.1 「禁欲的修行者」(特にバラモン)

バラモンの修行者にかかる形で、brahmacārin の語が用いられることがある。次の詩節は、『スッタニパータ』第3章 11 経で、アシタという人物が、後に仏陀⁽⁵⁾となる王子が生まれたと聞いて会いに行った際のものである。

Suttanipāta 695ab (3.11 Nāraka)

so sākiyānaṃ vipulaṃ janetvā pītiṃ antepuramhā niragama brahmacārī

シヤカ族の人々に [生まれたばかりの仏陀を見てその吉相を語り] 大きな喜びを起こさせてから、brahmacārin [であるアシタ] は後宮を去った。

この詩節の主語であるアシタは、少し前の箇所では「アシタ仙」(asito isi, Suttanipāta 679), 「結髪をもつ聖仙」(jaṭṭi ... isi, 同 689) といわれているから、バラモンとみられる⁽⁶⁾。聖仙 (isi, サンスクリット語で ṛṣi) とよばれる人物が、師に従属して聖典学習と修行をするヴェーダ学生であるとは考えづらい⁽⁷⁾。つまり、この箇所の brahmacārin は「ヴェーダ学生」という意味で用いられてはいない。また、ここはアシタの聖仙としての修行を描写する文脈ではないから、彼が性的禁欲を守っていることは十分ありうるにしても、この箇所の brahmacārin が狭義の「性的に禁欲している [者]」という限定的な意味でなければならぬ必然性はない。より広義に、「[性的禁欲を含む務めに励む] 修

行を行っている [者]；禁欲的修行者」を表しているとするのが妥当である。

3.2 「禁欲的修行者」(〔真の〕バラモン)

次に挙げる『ダンマパダ』の詩節では、brahmacārin であることが、バラモンの——この場合は仏教のいう真のバラモンの——あり方であると語られる。

Dhammapada 10.142 (Daṇḍavagga)

alaṃkato ce pi samaṃ careyya santo danto niyata brahmacārī

sabbesu bhūtesu nidhāya daṇḍaṃ so brāhmaṇo so samaṇo sa bhikkhu

[どのような形に身なりを⁽⁸⁾] 調べていても、鎮まった、抑制された、制御された、brahmacārin として、平静に行動すべきである、一切の存在に対する棍棒（暴力）を下に置いて。それが〔真の〕バラモンである。それが努め励む人（沙門）である。それが乞食修行者（比丘）⁽⁹⁾である。

この箇所
の brahmacārin も、文脈上、「〔師のもとでヴェーダ聖典を学ぶ〕ヴェーダ学生」をさすものではない⁽¹⁰⁾。「鎮まった」(santa)、「抑制された」(danta)、「制御された」(niyata) と、自己を制御している状態を示す語とともに並んでいることから、自制している状態にある「禁欲的修行者」をさすとま
ずはみられる。特に性的禁欲に関する自制を強調するために「〔性的禁欲を含む
務めに励む〕修行を行っている [者]」という意味で用いられている可能性
がある。さらに狭義に「性的に禁欲している [者]」が意図されていることも
ありうる。

誰についていわれるかによって、brahmacārin とよばれる者がどの程度厳密に性的禁欲を守るのかには幅が生じうる。上掲箇所では、「〔真の〕バラモン⁽¹¹⁾」と同置されている「沙門」と「比丘」は明らかに出家者であるから、性的禁欲は厳密に守らねばならない。ただしこのことは、この箇所の

brahmacārin の語が、性的禁欲を含む広義の「禁欲的修行を行っている [者]」という意で用いられている可能性を排除しない。

4. 「性的に禁欲している者」としての brahmacārin

4.1 出家修行者の場合

『ブラフマジャーラスutta』(Brahmajālasutta) の、仏陀が比丘たちに対して戒について語る節 (cūla-śīla 「小戒」) では、沙門ゴータマ (仏陀) を示す形容詞ないし名詞として、brahmacārin の語が用いられている。『沙門果経』(Sāmaññaphalasutta) では比丘について同様の表現がみられる⁽¹²⁾。沙門も比丘も出家修行者である。

Dīgha-Nikāya I 4 (Brahmajālasutta); cf. I 63 (Sāmaññaphalasutta); etc.

pāṇātipātamaṃ pahāya pāṇātipātā paṭivirato samaṇo gotamo nihitadaṇḍo nihitasattho lajjī dayāpanno sabbapāṇabhūtahitānukampī viharatī ti. iti vā hi bhikkhave puthujjano tathāgatassa vaṇṇaṃ vadamāno vadeyya. adinnādānaṃ pahāya adinnādānaṃ paṭivirato samaṇo gotamo dinnādāyī dinnapāṭikaṅkhī athenena sucibhūtena attanā viharatī ti. iti vā hi bhikkhave puthujjano tathāgatassa vaṇṇaṃ vadamāno vadeyya. abrahmacariyaṃ pahāya brahmacārī samaṇo gotamo ārācārī virato methunā gāmadhammā ti. iti vā hi bhikkhave puthujjano tathāgatassa vaṇṇaṃ vadamāno vadeyya. ...

『『殺生を捨て、殺生をやめ、沙門ゴータマは、棍棒を下に置き、刃物を下に置き、恥じらいをもち、憐れみをそなえ、すべての生物たちの利益に思いやりをもって暮らしている』と、このように実にまた、比丘たちよ、如来の称赞を語る凡夫は語るべきである。『与えられないものを取ることを捨て、与えられないものを取ることをやめ、沙門ゴータマは、与えられた

ものを取る者として、与えられるものを待ち、盗まないことによって清浄となった自己をもって暮らしている』と、このように実にまた、比丘たちよ、如来の称賛を語る凡夫は語るべきである。『abrahmacariya を捨て、brahmacārin として（あるいは、brahmacārin の状態で）、沙門ゴータマは、遠ざかっていて、村の（世俗の）慣行である性交をやめている』と、このように実にまた、比丘たちよ、如来の称賛を語る凡夫は語るべきである。……」

殺生をやめること、不与取をやめることの次に、abrahmacariya をやめる話題がきている。この後、不妄語をやめること（mūsavādaṃ pahāya ... 「虚偽を語ることを捨てて……」）、離間語をやめること（piṣuṇāvācaṃ pahāya ... 「中傷の言葉を捨てて……」）などが続く。文脈からみて、abrahmacariya は「性的禁欲ではないこと」すなわち性的禁欲を守らないことをさし⁽¹³⁾、brahmacārin は性交をやめている狭義の「性的に禁欲している [者]」をさしている。

4.2 在家信者の場合 (A)：ウポーサタの際に性的禁欲を守る

在家信者は、日常生活において完全な性的禁欲を守ることはない。出家せず社会で暮らしている在家の者にとって、子をもうけることは自然かつ重要な営みで、そのためには性交が必要である。ただし在家者も、仏教徒として野放図な性的行動をしないように戒められてはいた。

なかでも毎月の特定期日には、在家信者は普段より厳しい戒めに服すこととされた。ウポーサタ（uposatha 「[誓戒を守って] 夜を明かすこと；布薩」⁽¹⁴⁾）である。以下に引用するのは、在家者のウポーサタに関する経典の一部で、鹿子母講堂（Migāramātupāsāda）を寄進したとされる在家女性信者ヴィサーカーに、仏陀がウポーサタについて語る場面である。『ブラフマジャーラスッタ』や『沙門果経』で沙門ゴータマや比丘についていわれること（前節参照）とバ

ラレルの内容が、ここでは阿羅漢について述べられ、ウポーサタに服するときの在家者は阿羅漢に倣うと語られる。

Aṅguttara-Nikāya I 211 (Mahāvagga)

sa kho so visākhe ariyasāvako iti paṭisañcikkhati——yāvajīvaṃ arahanto pāṇātipātāṃ pahāya pāṇātipātā paṭiviratā nihitadaṇḍā nihitasatthā lajjī dayāpannā sabbapāṇabhūtahitānukampino viharanti, ahaṃ p' ajja imaṃ ca rattim imaṃ ca divasaṃ pāṇātipātāṃ pahāya pāṇātipātā paṭivirato nihitadaṇḍo nihitasattho lajjī dayāpanno sabbapāṇabhūtahitānukampī viharāmi. iminā pi aṅgena arahataṃ anukaromi uposatho ca me upavuttho bhavissati. ... yāvajīvaṃ arahanto abrahmacariyaṃ pahāya brahmacārī āracārī viratā methunā gāmadhammā, ahaṃ p' ajja imaṃ ca rattim imaṃ ca divasaṃ abrahmacariyaṃ pahāya brahmacārī āracārī virato methunā gāmadhammā. iminā pi aṅgena arahataṃ anukaromi uposatho ca me upavuttho bhavissati. ... iti.

[仏陀は言った、]「さてヴィサーカーよ、そういうその立派な人の弟子 (sāvaka⁽¹⁵⁾) は次のように考える、『阿羅漢 (出家して悟りを得た敬うべき人) たちは、生きている限り、殺生を捨て、殺生をやめ、棍棒を下に置き、刃物を下に置き、恥じらいをもち、憐れみをそなえ、すべての生物たちの利益に思いやりをもって暮らしている。私も、今日、この夜とこの昼の間は、殺生を捨て、殺生をやめ、棍棒を下に置き、刃物を下に置き、恥じらいをもち、憐れみをそなえ、すべての生物たちの利益に思いやりをもって暮らそう。この [戒の] 条項によっても阿羅漢を私は真似よう。そしてウポーサタは私によって服されたものとなるだろう。……阿羅漢たちは、生きている限り、abrahmacariya を捨て、brahmacārin として (あるいは、brahmacārin の状態で)、遠ざかっていて、村の (世俗の) 慣行である性交をやめている。私も、今日、この夜とこの昼の間は、abrahmacariya

を捨て、brahmacārinとして（あるいは、brahmacārinの状態で）、遠ざかっていて、村の（世俗の）慣行である性交をやめて[いよう]。この[戒の]条項によっても阿羅漢を私は真似よう。そしてウポーサタは私によって服されたものとなるだろう。……』……」と。

これによれば在家信者も、ウポーサタ（布薩）の夜には、出家者である阿羅漢と同様に、狭義の性的禁欲を守る。この箇所のbrahmacārinも、「[狭義の]性的禁欲を守っている[者]」を意味していることになる。

4.3 在家信者の場合（B）：日常生活で身を慎む

在家信者がbrahmacārinとよばれる場合について、前節の例では、布薩日に限って完全に性的に禁欲している者をさしていた。この延長線上に、完全に禁欲しているかは不明であるものの日常生活で身を慎んでいると思われる在家信者が、brahmacārinとよばれる用例がみられる。

Majjhima-Nikāya I 490f. (Mahāvaccagottasutta)

na kho vaccha ekaṃ yeva satam [na dve satāni na tīṇi satāni na cattāri satāni]⁽¹⁶⁾
na pañca satāni, atha kho bhiyyo va ye upāsakā mama sāvakā gihī odātavasanā
brahmacārino pañcannaṃ orambhāgiyānaṃ saṃyojanānaṃ parikkhayā opapātikā
tatthapariniḅbāyino anāvattidhammā tasmā lokā ti.

「ヴァッチャよ、百人だけではない、[二百人ではない、三百人ではない、四百人ではない、] 五百人ではない、しかして、私の在家信者であり、弟子（sāvaka）であり、家を持っていて（家長であり）、白い衣を着ていて、brahmacārinであり、五つの下位の束縛が完全に滅して、化生者（よりどころなく生まれる者）となり、そこで完全に涅槃を得て、その世界から[この世界に] 還らないことになっている者たちは、まさに、より多く

いる」と [仏陀は言った]。

「在家信者であり、白い衣を着ていて、brahmacārin である」という表現は、多少の異同をみせつつ複数の経典に現れる。その場合、その在家信者は、家を持つ者、つまりおそらく既婚の家長でありながらも、brahmacārin といわれている。この brahmacārin の語は、「[その人の立場において可能な範囲で] 性的禁欲を守っている [者]」という、広義の性的禁欲者をさして用いられているとみられる。在家信者が実際にどの程度まで厳格に性的禁欲を守るかは、人により状況により異なるであろう⁽¹⁷⁾。ここに引用した箇所では、在家とはいえ涅槃を得ることになっているといわれるほど身を慎んで暮らしている者のことを述べていると考えられる。

在家信者であっても、身を慎む決意が固ければ、完全な禁欲を守ることにも可能ではある。次に掲げる一節は、過去仏カッサパによく奉仕した壺作りの男が brahmacārin であるとカッサパが述べるものである。

Majjhima-Nikāya II 51 (Ghaṭṭikārasutta)

ghaṭṭikāro kho, mahārāja, kumbhakāro ekabhaddiko brahmacārī sīlavā
kalyāṇadhammo.

「壺作りのガティーカーラは、大王よ、一食者で、brahmacārin で、戒を保っていて、善い法をそなえています。」

壺作りを職とするガティーカーラは出家者ではないが⁽¹⁸⁾、彼は同経で「諸々の欲望 [の対象] への邪な行いをやめている」ともいわれているから⁽¹⁹⁾、出家者なみの禁欲生活をおくっていたのであろう。

5. sa-brahmacārin の語に含まれる brahmacārin

ヴェーダ文献では、sabrahmacārin という語が、中期ヴェーダのブラーフマナから現れ、「[同じ師のもとにいる] 同僚ヴェーダ学生」を意味する⁽²⁰⁾。

この語は初期經典にもみられる。『パーサーディカスッタ』(Pāsādikasutta)の次の箇所では、仏陀が弟子⁽²¹⁾に sabrahmacārin のありかたを説いている。

Dīgha-Nikāya III 128f. (Pāsādikasutta)

tesañ ca vo cunda samaggānaṃ sammodamānānaṃ avivadamānānaṃ sikkhataṃ
(thus v.l.; sikkhitabbaṃ PTS ed.) aññataro sabrahmacārī saṅghe dhammaṃ
bhāseyya. ... so evam assa vacaṇīyo — lābhā no āvuso, suladdhaṃ no āvuso, ye
mayāṃ āyasmantaṃ tādisaṃ sabrahmacāriṃ passāma ... ti.

「そして、チュンダよ、和合し、共に喜び、言い争わず、学んでいる、そういう君たちの中の、ある sabrahmacārin が、サンガでダルマを語ったとしよう。……[君たちがそれを正しいと思うならば、] 彼はそれについてこう言われるべきである、『私たちにとって利得になることである、友よ、私たちに善く得られたことである、友よ、私たちがこのような sabrahmacārin である尊者に会うことは。……』と。」

この箇所はサンガでダルマを語り合っている仏陀の出家弟子たちについていっているから、sabrahmacārin は明らかに、ヴェーダ文献がいうところの「同僚ヴェーダ学生」ではない。仏教のサンガの仲間としての「同僚の禁欲的修行者」をさしている。

sabrahmacārin の語中に含まれている「brahmacārin」がどの程度「学生；弟子」という意味合いをもつかは、sabrahmacārin が用いられる文脈による。ヴ

エーダ文献において、師 (ācārya) のもとで努め励みつつヴェーダを学習する brahmacārin には「ヴェーダ学生」という訳語が合い、同じ師のもとで学ぶ sabrahmacārin は「同僚ヴェーダ学生」となる。仏教経典の場合、仏陀を師とする出家弟子の集団という意味でのサンガの中では、sabrāhmacārin は「同僚 [仏弟子] 修行者」という意味をもちうる。仏教修行者集団 (僧団) としてのサンガでは、sabrāhmacārin は「同僚 [仏教] 修行者」ということになる。修行者同士という点に重点がおかれるときは、「共に禁欲的修行を行っている者」というニュアンスが濃くなる。

上掲の引用の最後にある「私たちにとって利得になることである、……私たちがこのような sabrahmacārin である尊者に会うことは」という表現と類似のものは、他にも多くの経典にみられる。次に掲げる『アリヤパリエーサナスッタ』(Ariyapariyesanasutta) には、仏陀が成道前に様々な修行をしていた際に二人の師についたことを回想する場面がある。仏陀は師たちの教えをすぐに理解し、師の一人には対等の立場と認められ、もう一人には師と認められる⁽²²⁾。

Majjhima-Nikāya I 163-165 (Ariyapariyesanasutta); cf. I 240; II 212

so evaṃ pabbajito ... yena ālāro kālāmo ten' upasaṅkamim, upasaṅkamtivā ālāraṃ kālāmaṃ etad avocaṃ: icchāṃ' ahaṃ āvuso kālāma imasmiṃ dhammavinaye brahmacariyaṃ caritun ti. ... lābhā no āvuso, suladdhaṃ no āvuso, ye mayaṃ āyasantaṃ tādisaṃ sabrahmacāriṃ passāma. ... ehi dāni āvuso, ubho va santā imaṃ gaṇaṃ pariharāmā ti. iti kho bhikkhave ālāro kālāmo ācariyo me samāno antevāsiṃ maṃ samānaṃ attano samasamaṃ ṭhapesi.

「こうして出家して、……アラーラ・カーラーマのところに私は近づいた。近づいて、アラーラ・カーラーマに次のように私は言った、『友よ、カーラーマよ、この法と律において brahmacariya⁽²³⁾を行うことを私は望む』と。……[教えを理解した仏陀にアラーラ・カーラーマは言っ

た、]『私たちにとって利得になることである、友よ、私たちに善く得られたことである、友よ、私たちがこのような sabrahmacārin である尊者に会うことは。…… さあ来い、友よ、我々は他ならぬ二人でいて、この「アーラーラの弟子たちの」集団を率いよう』と。このように、比丘たちよ、アーラーラ・カーラーマは私の師 (ācariya) でありながら、近住弟子 (antevāsin⁽²⁴⁾) である私を、自分と対等 [の立場] に立たせた」。

この箇所の子 sabrahmacārin は、「同僚の禁欲的修行者；共に禁欲的修行 (brahmacariya) を行う者」をさしている。アーラーラ・カーラーマと仏陀は、最初は師と近住弟子という関係であったが、対等と認められてからも、共通の師をもつ者同士となったわけではないから、ここでの sabrahmacārin は「同僚学生；同僚弟子」ではなく、語中の brahmacārin に「学生；弟子」という意味はない⁽²⁵⁾。

6. むすび

以上に見てきたように、パーリ語初期仏教経典における brahmacārin の語は、「[性的禁欲を含む修行を行っている] 禁欲的修行者」一般か、あるいはより狭義の「性的に禁欲している者」の、いずれかをさす。これらの語義はヴェーダ文献からみられるものであるが、ヴェーダ文献に古くから類出する「[師のもとでヴェーダ聖典を学ぶ] ヴェーダ学生」というもう一つの主要語義を表す用例は、初期仏教経典にはみられない⁽²⁶⁾。

sabrahmacārin という語は、初期経典では基本的に「同僚の禁欲的修行者」の意で、文脈によって、仏陀のもとにいる同僚の仏弟子、仏教修行者集団としてのサンガで共に修行している者、あるいは師匠を同じくしなくとも修行者同士である者をさして用いられている。この語の中の brahmacārin にも「ヴェー

ダ学生」の意味合いはない。

上述のとおり、ヴェーダ文献でも brahmacārin の語には、「[師のもとで禁欲的修行生活を行いながらヴェーダを学ぶ] ヴェーダ学生」と、「性的禁欲を守っている [者]」という二つを軸に、意味の幅はある。ヴェーダ文献と初期経典とにおけるニュアンスの違いをいうならば、仏教経典は、禁欲的修行（性的禁欲を含むがそれのみに限らない実践修行）をさす brahmacariya の語を重視し多用しており、brahmacārin の語のほうについては、特定の存在をさす名詞のように（「ヴェーダ学生」のように）用いることはせず、禁欲的修行ないし性的禁欲を行っている（brahmacariya を行っている）者全般について散発的に用いている。brahmacārin の用例数は brahmacariya に比べてはるかに少ない。

最初に述べたように、ヴェーダ文献では、brahmacārin に「ヴェーダ学生」という語義の用例が古くから確認されるのに対して、brahmacariya は初期ヴェーダ以来、広義の「禁欲的修行」の意で用いられていた。この微妙な差が、初期仏教経典にも反映されたかもしれない。仏教は禁欲的修行を重んじ、それに brahmacariya という幅広い意味を有する語を充てて様々な文脈で用いた。一方 brahmacārin の語は、ヴェーダ文献にも性的禁欲者をさす用例はあるものの、「[ヴェーダ聖典を学習する] ヴェーダ学生」というバラモン社会の成員をさす意味合いが古くから色濃く、ヴェーダ文化との結びつきがひろく知られていたために、ヴェーダの権威を認めない他の宗教文献においては、広い意味には用いられづらかった可能性がある。

*本研究は JSPS 科研費 JP17H02268 の助成を受けたものである。

注

- 1 Ṛgveda 10.109.5.『リグヴェーダ』での用例がこの一箇所のみのため、この詩節における brahmacārin- の語義は確定されていない。先行研究では、「ブラフマン（[聖典の] 言葉）に携わる [者]；リグヴェーダの詩人たるバラモン」と取るもの、「ヴェーダ学生」と取るもの、「禁欲している [者]」と取るものがある。*brāhman +

- car という構文は確認されていない。梶原 [2019: 63f.; 91, n. 6; 2021: 28f.] と、そこに挙げた先行研究を参照。
- 2 梶原 [2019] を加筆改稿した章を含む梶原 [2021] (特に 27-124 頁) も参照。
 - 3 梶原 [2016: 46; 2021: 102] 参照。
 - 4 ヴェーダ文献とパーリ語初期経典の間で異なる点としては、後者ではこの語が「仏陀(注5参照)の教え」をさして用いられる例が一定数みられることがあげられる。brahmacariya が「説く」「存続する」という動詞とともに用いられる例: Suttanipāta 567ab svākkhātaṃ brahmacariyaṃ selā ti bhagavā sandiṭṭhikaṃ akālikaṃ 「『ブラフマチャリヤは善く説かれた、セーラよ』と世尊は [言った]、『現世で即座なるものとして』」; Dīgha-Nikāya III 127 (Pāsādikasutta) yathayidaṃ brahmacariyaṃ addhaniyaṃ assa ciraṭṭhikaṃ ... 「『このブラフマチャリヤが長く存続するように……』」など。梶原 [2016: 62f.; 91, n. 99; 2021: 333f.] 参照。
 - 5 本稿でのゴータマ・ブッダの呼称は、訳文ではできるだけ原語にそって訳し、地の文では「仏陀」と表記する。また、引用文中でゴータマに言及されているが単語で明示されていない場合、その時点でゴータマがまだ悟りを開いていなくても訳文中では「仏陀」と補う。
 - 6 jaṭin-「結髪をもつ(頭を丸剃りにしていない)」者については、阪本(後藤) [1994; 2014] 参照。
 - 7 『アタルヴァヴェーダ』以来、「ヴェーダ学生」は師に従属する者であることが強調される。梶原 [2016: 37-50; 2021: 33-83] 参照。
 - 8 直前の詩節(Dhammapada 10.141)が裸体行者や結髪者などについて述べているので、各種の修行者の姿を調べていても、の意とみられる。中村 [1978: 99] (同詩節の訳注) 参照。
 - 9 bhikkhu- (サンスクリット語で bhikṣu-) は広義には「乞食者; 托鉢修行者」全般をいう。仏典において狭義に用いられる場合は「[出家した仏教徒として] 乞食を行う者; 比丘」をさす。
 - 10 バラモン教のヴェーダ学生 (brahmacārin) も、自制し、乞食を行じるべきとされる。梶原 [2021: 39f.; 147; etc.] 参照。しかしここでは仏教が考える真の「バラモン」像についての詩節が前後に続くから、その文脈に沿って読むべきである。
 - 11 バラモン教(ヴェーダの宗教)の文化は祭官階級の人たるバラモンを中心とする。一方で、バラモン教の外にある宗教の文献において、バラモンの家系に生まれることによってバラモンなのではなく、その宗教が正しいとみなす行いをする人が[真の]バラモンである、という表現がみられる。『ダンマパダ』では他の詩節にもリフレインのように現れる (Dhammapada 26.383-423)。ジャイナ教文献における類似

のものとしては、Uttarajjhāyā 25.19-29; 34 がある。中村 [1978: 143]; 荒牧・榎本・藤田・本庄 [1986: 405] 参照。出自が不明であってもバラモンにふさわしい振る舞いをする者であればバラモンとみなすという場面は、ヴェーダ文献の中にもみられる。Chāndogya-Upaniṣad 4.4.1-5 で、師に入門を申し込んだサティヤカーマ・ジャバーラは、師にゴートラを尋ねられ（ヴェーダの知識を得るために入門しうる出自の者かを確認され）、私生児なのでゴートラはわからない、母ジャバーラーの名の派生形を名乗っている、と答える。師は「バラモンでない者にはそのように [正直には] 言えない。……君を入門させよう。君は真実から離れなかった (naitad abrahmaṇo vivaktum arhati / ... / upa tvā neṣye na satyād agā iti /)」と言って彼の入門を認める。

- 12 次節に引用する、齋戒日（布薩）に在家信者が阿羅漢に倣うことについて述べる Aṅguttara-Nikāya I 211 (Mahāvagga) にも、類似の記述がある。
- 13 Cf. Suttanipāta 400c (2.14 Dammika) abrahmacariyā virameyya methunā 「abrahmacarya である性交をやめるべきである」; etc.
- 14 在家者の uposatha については、たとえば Suttanipāta 400-402 参照。ヴェーダの宗教における upavastha との対比については阪本（後藤）[2018] 参照。
- 15 sāvaka- 「[教えを] 聞く者」。初期の仏典では、出家と在家をとわず仏陀の教えを聞く仏弟子をさし、後には出家修行僧をさすようになる（中村 [2010: 904f.]）。
- 16 前の部分から同文が続いているため、刊本では角括弧内のテキストは省略されている。
- 17 上掲の引用は、ヴァッチャの「こういう比丘が一人でもいるか…… こういう在家信者が一人でもいるか」という問いに仏陀が答える文脈にある。この引用箇所次の部分では、brahmacārin とはいわれず、kāmbhogin 「欲望 [の対象] を享受している [者]」といわれる在家者が言及される：Majjhima-Nikāya I 491 na kho vaccha ekam yeva satam ... na pañca satāni, atha kho bhiyyo va ye upāsakā mama sāvakā gihī odātavasana kāmbhogino sāsanakarā ovādapatīkarā tiṇṇavicikicchā vigatakathaṃkathā vesārajappattā aparappaccayā satthusāsane viharantīti 「『ヴァッチャよ、百人だけではない、[二百人ではない、三百人ではない、四百人ではない、] 五百人ではない、しかして、私の在家信者であり、弟子 (sāvaka) であり、家を持っていて (家長であり)、白い衣を着ていて、欲望 [の対象] を享受していて、教えを行い、訓戒に対応し、疑いを超え、疑惑を離れ、自信を得て、他に依拠せず、教師の教えにおいて暮らしている者たちは、まさに、より多くいる』と [仏陀は言った]」。在家者の修行実践の厳格さの濃淡については、藤田 [1964, esp. 65f.]; 福田 [2006]; 村上 [2019] とこれらに挙げられている参考文献を参照。

- ダルマシャーストラやサンスクリット叙事詩には、既婚の男性について、「[その人の立場において可能な範囲で] 性的禁欲を守っている [者]」という意味で用いられている brahmacārin の用例がみられる: Mahābhārata 3.199.12cd; 12.214.10ab bhāryām gacchan brahmacārī ṛtau bhavati brāhmaṇaḥ 「バラモン [家長] は、[妻の妊娠] 適時に [のみ] 妻に近づくなら、brahmacārin となる (性的禁欲を守っている [者] といえる)」。既婚のバラモンが、子をなすという家長の義務を果たすために、必要な時、すなわち妻が月のうち妊娠可能な状態である時期にのみ彼女と交わるならば、実際には完全な禁欲を守っているわけではないものの、性的禁欲を守っているも同然といえるというのである。Cf. Manu-Smṛti 3.45; 3.50. こうした、「[特定の条件下では] 性的禁欲を守っている [に等しい]」という用法は、brahmacarya についてはウパニシャッド新層からみられる。梶原 [2019: 85f.; 2021: 91-98] 参照。
- 18 少し前の箇所、彼は友人に、自分は老いた父母の世話をしているため出家しない、と語っている (Majjhima-Nikāya II 48)。
- 19 Majjhima-Nikāya II 51 ghaṭṭikāro kho, mahārāja, kumbhakāro pāṇātipātā paṭivirato adinnādānā paṭivirato kāmesu micchācārā paṭivirato musāvādā paṭivirato surāmerayamajjapamādaṭṭhānā paṭivirato 「壺作りのガティーカーラは、大王よ、殺生をやめ、与えられないものを取ることをやめ、諸々の欲望 [の対象] への邪な行いをやめ、虚偽を語ることをやめ、スラーやメーラヤなどの酒という放逸の原因 [になるもの] をやめています」。Cf. Saṃyutta-Nikāya I 36 (Ghaṭṭikārasutta) virato methunā dhammā brahmacārī nirāmisso 「[世俗の] 慣行である性交をやめていて、brahmacārin であり、貪りがなかった」; Saṃyutta-Nikāya I 60 Ghaṭṭikārasutta (同)。なお、テキストによって Ghaṭṭikāra, Ghaṭṭikara, Ghaṭṭikāra などの表記のゆれがみられる。
- 20 梶原 [2016: 92, n. 108; 2021: 117, n. 100; 366, n. 52] 参照。
- 21 ここで話しかけられるのは Cunda samaṇoddesa (チュンダ沙弥)。「沙弥」と訳される samaṇoddesa の地位は、律蔵の整備段階によって多少の差異があるが、一般には比丘になる前の年少の見習いとされる。山極 [1998] およびそこに挙げられている先行研究を参照。
- 22 梶原 [2016: 63f.; 2021: 334-336] 参照。
- 23 brahmacariya については本稿第2節参照。ここでは特に、「[師に入門して住する] 禁欲的の修行生活」をさしている (仏陀はすでに出家しているから性的禁欲も必須であろう)。ヴェーダ入門儀礼の形式の一つに、師のもとに赴いて brahmacarya に住することを申し込むというものがある。プラーフマナ新層からウパニシャッドに特徴的にみられるもので、原則的には、すでに一通りの知識を有している学者や神々が、さらに秘義を学ぼうとするときに行う。Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad 6.2.4 pre-

hi tu tatra pratītya brahmacariyaṃ vatsyāva iti 「[ヴェーダの教えの中にあることを王族に問われて答えられずに戻ってきた息子に学匠アールニは言った。]『しかし、行け、そこ（王のところ）へと戻って、私たち二人で [王の弟子となって] brahmacariya に住そう [そして教わろう]』と」など。本文で引用した『アリヤパリエーサナスutta』の場面は、「法と律のもとで」と仏教的表現を挟んではいるが、初学者でない者（出家して修行中の仏陀）が師（ācāriya としてのアラーラ）のもとへ brahmacariya を行うことを求めて赴くという点で、ウパニシャッドの入門形式とパラレルである。梶原 [2016: 63f.; 73f.; 2021: 272f.; 283-285; 346-348] 参照。

24 antevāsin は文字通り傍らに住する「近住弟子」を意味する。ヴェーダ文献では、師の家に住み込むヴェーダ学生をさす。ヴェーダ文献以外では、文脈に応じて、各分野の師匠のもとに住む弟子・徒弟をさす。梶原 [2016: 92, n. 108; 2021: 366, n. 52] 参照。

25 『アリヤパリエーサナスutta』ではこの後、仏陀はアラーラ・カーラーマのもとを去り、ウッタカ・ラーマプッタのもとに赴く。ウッタカ・ラーマプッタは、仏陀の sabrahmacārin でありながら仏陀を師（ācāriya）の地位に立たせたとされる。Majjhima-Nikāya I 166 (Ariyapariyesanasutta) ehi dāni āvuso, tvaṃ imam gaṇaṃ pariharā ti. iti kho bhikkhave uddako rāmaputto sabrahmacārī me samāno ācariyaṭṭhāne ca maṃ ṭhapesi 「『さあ来い、友よ、君がこの集団を率いよ』と [ラーマプッタは言った]。このように、比丘たちよ、ウッタカ・ラーマプッタは、私の sabrahmacārin でありながら、師の地位に私を立たせた」。

26 一見当然のようであっても、このことは確認しておく必要がある。初期仏典がヴェーダ文献の重要単語を用いるときは、その意味を変えないで使うことも、微妙に変えることも、大きく変えることもあるからである。注 10 も参照。

参考文献

- 荒牧典俊・榎本文雄・藤田宏達・本庄良文 1986. 『ブッダの詩 I』. 講談社.
梶原三恵子 2016. 「ウパニシャッドと初期仏典の一接点——入門・受戒の儀礼とブラフマチャリヤ」『人文学報』 109: 33-102.
—— 2019. 「ヴェーダ文献における brahmacārin- の語義 ——『学生』と『禁欲者』のあいだ」『東洋文化研究所紀要』 175: 61-103.
—— 2021. 『古代インドの入門儀礼』法蔵館。

- 片山一良 2005. 『パーリ仏典 第2期5 長部 (ディーガニカーヤ) パーティカ篇 I』 大蔵出版.
- 阪本 (後藤) 純子 1994. 「髪と鬚」『日本仏教学会年報』 59: 77-90.
- 2014. 「出家と髪・鬚の除去——ジャイナ教と仏教との対比」『奥田聖應先生頌寿記念 インド学仏教学論集』 334-349. 佼成出版社.
- 2018. 「ヴェーダ祭式 Upavasatha と仏教 Uposatha 『布薩』: 梗概」『印度学佛教学研究』 66 (2): 968-974.
- 中村 元 1978. 『ブツダの真理のことば 感興のことば』 岩波文庫.
- 2010. 『広説佛教語大辞典 縮刷版』 東京書籍.
- 福田 琢 2006. 「ブツダに称賛される在家声聞」『パーリ学仏教文化学』 20: 23-40.
- 藤田宏達 1964. 「在家阿羅漢論」『結城教授頌寿記念 佛教思想史論集』 51-73. 大蔵出版.
- 村上 勉 2019. 「原始仏教に見られる在家者の解脱・涅槃」『佛教大学仏教学会紀要』 24 (藤堂俊英教授 並川孝儀教授 古稀記念号): 95-117.
- 山極伸之 1998. 「律蔵にみられる沙弥」『日本佛教学會年報』 63: 65-86.
- 渡瀬信之 1981. 「Dharmasūtra において見出される Āśrama 観」『東海大学紀要: 文学部』 36: 1-18.
- Olivelle, Patrick 1993. *The Āśrama System. The History and Hermeneutics of a Religious Institution*. New York: Oxford University Press.

On the Term *brahmacārin-* in the Early Pāli Buddhist Canon

KAJIHARA MIEKO

The term *brahmacārin-* is first attested in the Ṛgveda, the oldest Sanskrit text in India. It literally means “[one who is] engaged in the *brāhman*,” the word *brāhman* standing for, at least in the early Vedic period, the magical power of the sacred speech. In the Vedic literature, the *brahmacārin* is used principally in two meanings: (1) “the Vedic student who learns the Veda from his teacher, leading an ascetic life”; and (2) “[one whoever is] keeping chastity.”

The term *brahmacārin-* is also attested in the early Pāli Buddhist canon. It represents either “[one who is] leading an ascetic life, especially by keeping chastity,” or, more specifically, “[one who is] keeping chastity.” While these meanings have correspondences in the Veda, no instance of “the Vedic student” is found in the Pāli canon.

The term *brahmacariya* (*brahmacarya* in Sanskrit) is frequently attested in the Pāli Buddhist texts. Both in the Vedic and the Buddhist traditions, it is employed to mean “asceticism,” and, in a narrower sense, “chastity.” The broadness of its meaning would have made it possible to be used in the traditions. On the other hand, the term *brahmacārin* as “the Vedic student” is so closely connected to the Vedic culture that it would have been less used in the traditions outside the Veda in this particular meaning.